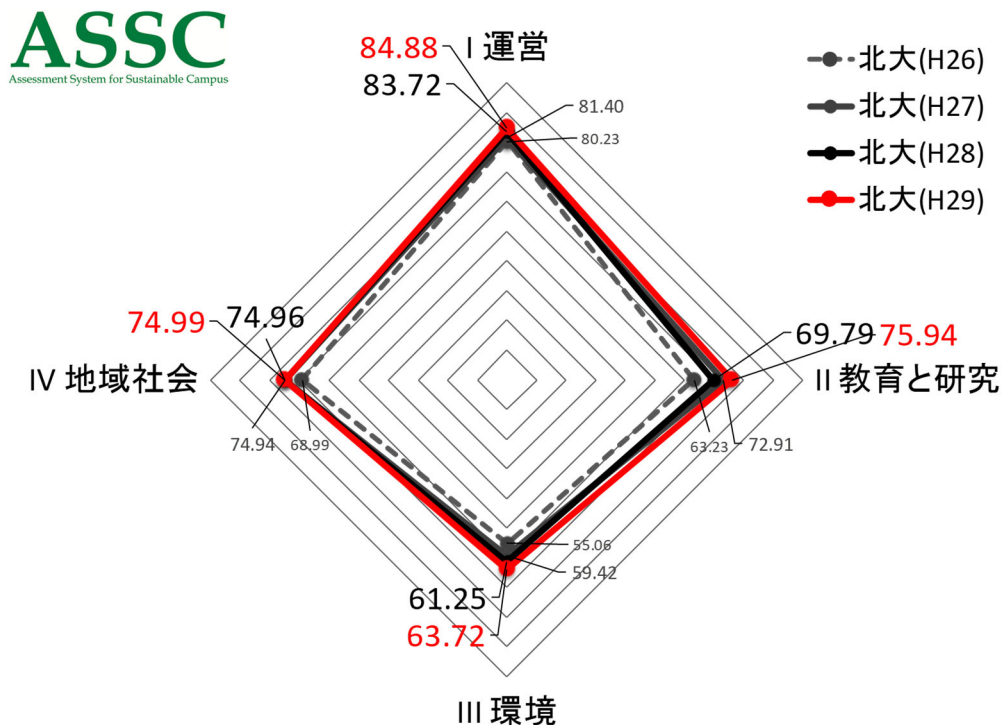


サステイナブルキャンパス評価システムASSC（アスク）による  
平成29年度評価（確定版）について



◆平成28年度からの変化

・運営部門（1%上昇）：

評価基準16「サステナビリティを推進するための国の予算を、大学をあげて獲得しているか。」について、北大概要の「教育・研究プログラム」の下記の大型プロジェクトが該当。

●地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（科学技術振興機構）の研究プロジェクトが平成25年度、28年度、29年度に採択されている。いずれも6年間のプロジェクトである。28年度はこのプロジェクトの情報を見落としており、29年度は上記の評価基準（1点分）の加点となった。

- ・平成25～30年度 アフリカにおけるウィルス性人獣共通感染症の調査研究（人獣共通感染症リサーチセンター 教授 高田礼人）
- ・平成28～33年度 ザンビアにおける鉛汚染のメカニズムの解明と健康・経済リスク評価手法および予防・修復技術の開発（獣医学研究院 教授 石塚真由美）

- ・平成29～34年度 フィリピンにおける極端気候の監視・情報提供システムの開発（理学研究院 教授 高橋幸弘）

・教育と研究部門（6%上昇）：

評価基準48「新入生向けのサステナビリティ・オリエンテーションや、学生向けの環境教育を実施しているか」（全学での実施の場合、満点の3点得点）で得点。

- H28年度は提案募集型事業「サステイナブルキャンパスをつくる！」による全学的なインセンティブ事業が未実施となり得点率が低下していた。H29年度は、新たにHokkaido サマー・インスティテュートでサステイナブルキャンパスの科目が開講された。これには、サステイナビリティ・リテラシーや大学生活に関する環境教育の要素が含まれること、なおかつ、サステイナブルキャンパスマネジメント本部による開講科目であり、全学的な取組と見なせることから、3点の加点となった。

・環境部門（2.5%上昇）：

評価基準81「全学的に、キャンパス外の景観に配慮したガイドラインがあるか（建物の高さ、密度など）」の3加点、評価基準135「歴史的資産、建造物の利活用計画を実現する体制ができているか」の1加点が寄与。

- 81番については、キャンパスマスタープラン2018において、遠景への眺望を保全するため、建物高さを抑制する地区を「ビジュアルコリドール」とする位置づけがなされたことによるもの。
- 135番については、歴史的資産活用TFと施設部の取り組みとして、重要文化財15棟（第二農場9棟、植物園6棟）及び総合博物館の改修工事、重要文化財である第二農場牧牛舎サイロ避雷針本体の装飾の復元、農学部本館の建物装飾品の成分・構造調査、埋蔵文化財の埋没河川と遺構の計画調査が実施されたことによるもの。

●エネルギー・資源の定量評価について：

- ・一次エネルギー消費量（札幌と函館の合計）  
H27: 171万[GJ]    H28: 180万[GJ]    H29: 175万[GJ] (前年度比3%減)
- ・一次エネルギー消費量（札幌と函館の合計）の原単位  
H27: 2.22[GJ/m<sup>2</sup>]    H28: 2.34[GJ/m<sup>2</sup>]    H29: 2.22[GJ/m<sup>2</sup>] (前年度比5%減)
- ・一般廃棄物排出量（札幌キャンパスの一般ごみと燃料化ごみの合計）  
H27: 7118[m<sup>3</sup>]    H28: 6985[m<sup>3</sup>]    H29: 7436[m<sup>3</sup>] (前年度比1%増)

・地域社会部門（0.3%上昇）：

評価基準162「建築物に対する耐震構造基準が適用され、それに沿った設計、改修がなされているか」という評価に対し、IS値0.7以上を持つ建物の延床面積の施設延べ床面積に対する割合によりわずかに上昇した。

## ◆今後の課題

(総評) 環境部門と運営部門は少しずつ継続して上昇している。地域社会部門は伸びが無くなってきた。教育・研究部門は、サステナビリティに関する全学的な枠組みが依然構築されておらず、年度ごとに増減する不安定な得点率となっている。

## ●運営部門は満点に近づきつつあるものの、課題は

17番：サステナビリティを推進するための民間の予算を、大学をあげて獲得しているか。

35番：サステナビリティに関わる運営業務が教員の業績として評価される全学的な仕組みがあるか。

42番：地元業者を積極的に利用しているか (e.g. 食材、建材等の資源の地元調達を実施しているか)

など。

## ●教育と研究部門の課題

45番：大学独自にサステナビリティを定義し、該当する教育科目、インターシップ、講座などをとりまとめ、カリキュラムとして整備しているか。

58番：キャンパス外でのインターンシップ (環境、サステナビリティに関わるもの) を  
大学として促進しているか。

## ●環境部門の課題

・定性的な面で得点が伸びないものは、

—129番：キャンパス周辺の交通網 (公共交通等) と連結する動線の設計、計画策定、実現、成果の評価

—112, 113番：省エネ設計基準を満たす建築面積の把握と評価、満たすためのインセンティブ導入

・定量的評価では、温室効果ガス排出削減、エネルギー消費量削減、再生可能エネルギーの導入促進など、抜本的に新しい取組みを立ち上げなければ向上しない。

## ●地域社会部門の課題

—「被災後の大学の役割」の分野については進展がない。部局の取組みはあるが、大学全体としての戦略に盛り込まれていないことが原因。

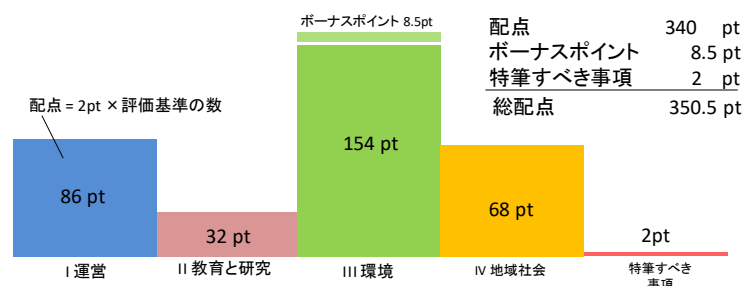
ー地域防災計画への関与、行政への政策提言など、USRの観点から大学として公式に地域に関わる取組みがない。「災害対策ガイドライン(H23年度策定)」にも、以下のうち①の役割に絞って対策を検討したと明記されている。

災害時において本学が果たすべき役割：

- ① 災害時に学内に滞在する者の安全を確保すること。学内に滞在する者とは、学内関係者のみならず学外者を含む。
- ② 大学の社会的使命を継続的に実行すること
  - ・ 本学の本来的使命（教育研究，社会への情報発信等）
  - ・ 災害時に期待される使命（地域防災施設としての機能，防災人的資源供給等）
 （災害対策ガイドライン(H23年度策定)より）

#### ◆補足一認証制度とは

ASSC（アスク）は、サステイナブルキャンパス推進協議会（CAS-Net JAPAN）を通じて国内外の高等教育機関で活用されている。同協議会では、下図の総合得点率に応じて、回答を提出した機関にサステイナブルキャンパスの認証を発行している。



総合得点率  $A[\%] = (\text{得点}) / (\text{配点「回答不可能」と回答した配点を除外}) \times 100$

- ・ 全4部門および特筆すべき事項を合わせた得点率で総合的な結果を把握できる。
- ・ 部門ごとの得点率で、どの部門に強み、弱みがあるか把握できる。

認証	総合得点率
プラチナ	$85 \leq A$
ゴールド	$65 \leq A < 85$
シルバー	$45 \leq A < 65$
ブロンズ	$A < 45$